

生涯スポーツとしてのバドミントンに関する研究

—大学生競技者に着目して—

A Study of Badminton as a Life Sport : Focusing on Players in University

1K08B225-0

指導教員 主査 原田宗彦 先生

氏名 山田 早織

副査 関 一誠 先生

【緒言】

生涯スポーツという言葉が使われるようになって久しい。長い中高年期を充実させ、活力ある生活を送るためのスポーツの役割が注目されるようになってきたのである。青年期後期である大学生はスポーツ・アイデンティティの体感やスポーツにおける楽しさの体感を通して、生涯スポーツ観を身につけていく時期ある。大学におけるスポーツを通して、スポーツの意識や価値などを体感する豊かな経験を積むことができれば、その後の運動継続が可能となる。

公益財団法人日本バドミントン協会の登録者数の推移をみると小学生、中学生、高校生と増えていくのに対し、学生（大学生、専門学校生）は急激に減っているが一般では中学生と同等まで増えている（図1）。大学生の部活動での競技人口を拡大させてゆくことが、バドミントン全体の競技人口の拡大につながる一方策として考えられる。

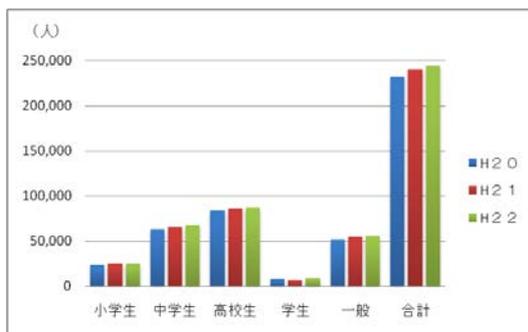


図1 公益財団法人日本バドミントン協会登録者数の推移
※公益財団法人日本バドミントン協会 HP より筆者作成

【目的】

大学生バドミントン競技者の特徴を明らかにし、生涯スポーツとしての普及の基礎資料を得ることを目的とする。

【方法】

本研究では、第62回全日本学生バドミントン選手権大会期間中の2011年10月14日～10月20日において、大学バドミントン部員を対象に質問紙調査を行った。質問紙は、山本・金崎・南（1992）と蔵本・菊池（2006）の参加動機尺度を参考にした。分析はSPSSを用いて、解析した。

【結果・考察】

サンプルの行動特性については、バドミントン開始年齢が

平均9.2歳、平均継続年数が11.2年であり、サンプルの平均年齢が20.2歳であるため、比較的長期にわたって継続しているものが多かった。過去行っていたスポーツ経験については水泳が最も多く、続いて球技系スポーツを行っていた者が多かった。参加動機に関する質問項目について因子分析した結果、「内発的動機」、「回避動機」、「親和動機」、「健康・体力動機」、「固執動機」、「自由・平等動機」の6つの因子が抽出された。今後の継続意図については、半数が続ける、3割が続けられない、どちらともいえないが2割となった。継続する理由については「熱中・没頭」「就業」、「成長・向上」、「生涯スポーツ」、逆に継続しない理由については「バーンアウト」「仕事・他競技優先」、「限界」があげられた。バドミントンを続けるにあたり、必要になるものについては、「利用できる施設」88.2%、「一緒に活動する仲間」86.7%であった。バドミントンの魅力については「技術・戦術」が最も多く、続いて「成長・向上」、「スピード」、「駆け引き」等があげられた。

参加動機についてt検定を用いて性別で比較すると、女性は「親和動機」、男性は「健康・体力動機」で継続していることがわかった。また、「回避動機」が高まるほど、その後のバドミントン継続意図に負の影響を及ぼすことが明らかになった。今後の方策としては、男女それぞれのニーズに合ったバドミントン環境づくりや機会を増やすこと、「回避動機」が高まるのを防ぎ、より積極的なバドミントンへの参加・継続を促すような、指導者、チーム体制作りが重要である。

継続意図の高さに影響を与えるのは、両親であった。このことから、生涯わたってスポーツを続けるためには、幼少期に多くのスポーツを経験し、その中から自分にあったスポーツを選択し、継続していけるような、両親を中心とした周囲の配慮・環境づくりが必要である。

【提言】

本研究で得られた大学生競技者の特徴を生涯スポーツとしてのバドミントンの基礎資料として活用することが可能である。スポーツ実施者の特性を明らかにし、指導者体制、チーム作りなどの環境を整えることで、生涯スポーツとしてのバドミントンの在り方を構築していくことができる。